

City Life NEWS

全国で注目される施策や課題は、地域で暮らす私たちにどう影響するのか?身近に起きた出来事やトレンドなど、幅広い分野のニュースを紹介していきます。ネットでもさまざまなニュースを紹介しています。



シティライフNEWS で検索

神戸をもっと元気に ファッションから広げる 地場産業の活性化

阪神・淡路大震災から23年。街は再建され人々の暮らしは日常を取り戻したものの、大きな打撃を受けた地場産業は、未だ、かつての輝きを取り戻してはいない。産業を活性化し、神戸をもっと元気にしたい...そんな想いを掲げ、官民で協力しながら“ファッション”というフィールドからさまざまな取り組みが広がっている。

港町として栄えた 神戸のファッション産業

慶 応3(1868)年の開港以来、諸外国との交易拠点として重要な機能を担ってきた神戸港。海外から豊かな資源や人の流入によってアパレルや靴、洋菓子、洋家具など様々な産業が発展し、独自の文化やライフスタイルが築かれてきた。1973年には全国に先がけて「ファッション都市宣言」がなされ、産業、都市、市民の三位一体で都市づくりを推進。92年に発足した公益財団法人神戸ファッション協会は「衣・食・住・遊」全般を“ファッション産業”と定義づけ、活性化に向けた取り組みを行ってきた。

ところが、95年の阪神・淡路大震災で、ケミカルシューズ分野がピーク時に比べ生産額が半分以下に縮小するなど、ファッション産業全体が大きな打撃を被った。「そ



神戸の地場産業ブランドの一例。

の後ゆるやかに回復しつつあるものの、かつての勢いとはいまだ開きがある」と神戸ファッション協会の藤田修司さんは話す。

復興に向けた起爆剤に

厳 しい状況を打破し「神戸の街を元気にしたい」と、2002年8月に第一回神戸コレクションが開催された。日本初のリアルクローズ(実際に着用できる最新の服)のファッションショーとし

て話題を呼び、今や13,000人の動員数を誇る一大イベントに成長した。この大きな舞台に、2015年より神戸・兵庫の地場産品をコーディネートしたブランド「KOBEXHYOGO FAVORITES」のステージが登場。シューズや帽子のほか、世界の約7割の加工を手掛ける真珠、全国トップクラスのシェアを誇る姫路や龍野の革製品など、魅力あふれるアイテムを展開している。目指すのは、“神戸エレガンス”として独自のファッション文化を発信してきた神戸のスタイルを紡ぐこと。神戸コレクション産みの親の高田恵太郎さんも「若い世代に上質の価値を生み出す神戸を知ってもらい、地場産業の未来につなげたい」と話す。



神戸コレクション制作委員会
エグゼクティブプロデューサー
株式会社ぜんまい
代表取締役 高田恵太郎さん

神戸の街全体に人を呼び 未来につながる取り組みを

神 戸ファッション協会などで構成する、神戸ファッションウィーク推進協議会では2006年よりコレクション開催に合わせた「KOBEFASHION WEEK」を展開。アパレルやグルメ、コスメなど100店舗以上の情報発信と各種イベントで、神戸の街に滞在し、神戸のファッション“文化”を楽しんでもらうことが目的だ。また、いずれの取り組みも地元の大学生を参加させ、若い世代の意見やアイデアを取り入れながら、ファッション産業を担う次世代の育成にも力を入れる。

市の担当者は、「神戸にしかない品質やデザイン性を民間事業者と協力しながら国内外に向けて発信し、かつての賑わいを取り戻したい」と今後の発展に向けた取り組みに、大きな期待を寄せる。



©神戸コレクション制作委員会

©神戸コレクション制作委員会
ショーのなかで人気モデルが身に付けた地場産業ブランド。

日本酒にもっと親しもう 灘五郷の日本酒文化をPR

阪神地区で受け継がれてきた産業の一つに、灘五郷での清酒造りがある。灘五郷は、神戸市の西郷、御影郷、魚崎郷と、西宮市の西宮郷、今津郷の総称で、各郷に2から10の酒蔵があり、清酒生産量は全国一。一方で、日本酒の国内消費量は減少傾向にあり、灘五郷も例外ではない。

酒蔵活性化プロジェクト 続々実施

日 本酒消費量が減少傾向にある中で、平成29年度から灘五郷酒造組合に、神戸市、西宮市阪神電気鉄道株式会社を加えた4者で「灘の酒蔵」活性化プロジェクト実行委員会」を結成し、灘五郷の認知度を高めようと、官民が連携してプロモーション活動を実施している。

ラッピングトレインの運行に始まり、阪神電車で酒蔵を巡るスタンプラリーを実施したり、灘の酒を提供する飲食店を紹介した「日本酒ガールの灘五郷ほろよいマップ」を各駅に設置するなど、企画が目白押しだ。阪神電車の担当者は「ラッピングトレインの写真がSNSで広まるなど、蔵開きでは昨年と比べて1割程来場者が増えました」と、プロジェクトの効果を感じている。スタンプラリーは5月6日まで実施する。



昨秋のラッピングトレイン。日本酒や灘五郷を表現する和風イラストを電車の車体にほどこした。



©一般財団法人神戸観光局

©一般財団法人神戸観光局

日本遺産認定めざす 阪神間5市で準備会

阪 神間に花開いた日本酒文化をさらにアピールすべく、関係各市が日本遺産の認定に乗り出した。清酒発祥の地を掲げる伊丹市をはじめ、神戸市、西宮市、尼崎市、芦屋市の5市が合同で、日本酒文化の日本遺産認定を目指すため「阪神間日本遺産認定申請準備会」を3月1日に発足した。

日本遺産とは、2015年に文化庁が創設した地域の歴史や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを認定する

事業。現在、兵庫県では「丹波篠山 デカンショ節」(篠山市)、「『古事記』の冒頭を飾る『国生みの島・淡路』」(淡路島3市)など4件が認定されている。

現存する酒蔵の中で日本最古である伊丹市の「旧岡田家住宅・酒蔵」、六甲山系の気候と「宮水」、丹波杜氏の優れた技が育んだ神戸・西宮市の「灘五郷」、日本一の生産量を誇る尼崎市の菰樽(こもだる)、酒造家の別邸として建てられた芦屋市の「ヨドコウ迎賓館」などの日本酒文化を国内外へ発信することで、地域の活性化を戦略的に図る。認定可否の発表は、2019年春頃。